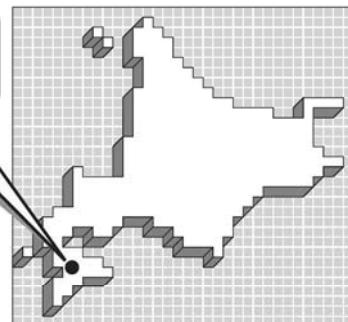


連載 わがマチの自慢 №.26

厚沢部町

おらいもファミリーが 暮らす素敵な過疎のまち



厚沢部町は北海道の南端、渡島半島の日本海側に位置し、国道二二七号線（函館市→江差町）が東西に横断、新函館北斗駅から車で約五〇分、函館駅からは車で約一時間一〇分の距離にある。三方を山林に囲まれ、町の総面積約四六〇km²の八割以

新函館北斗駅から車で約五〇分、函館駅からは車で約一時間一〇分の距離にある。三方を山林に囲まれ、町の総面積約四六〇km²の八割以

上が森林で、北限のヒバや五葉松と南限のトドマツが混在しており、学術上重要な植生が見られる。

鶴（うづら）川や安野呂（あんのろ）川などの支流を集めて町の中央を流れる厚沢部川は、アユが生息する良好な環境が維持されている。これら河川の流域に水田、丘陵地に畑が広がっており、農林業を基幹産業とする。人口は昨年一〇月末時点で約二、七〇〇人である。

素敵な過疎の まちをめざして

厚沢部町は一〇〇九年四月、「過疎」を受け入れた上で魅力あるまちづくりをめざそうと「素敵な過疎のまちづくり基本条例」を施行した。町民

が主体となって誰もが「住んでよかつた」「住んでみたい」「いつまでも住み続けたい」と思える素敵な町を実現することが目的である。

同年九月には町が一〇〇%出資して素敵な過疎づくり株式会社を設立。同社は、移住コンシェルジュの配置や移住体験できる「ちょっとくらし住宅」の運営など移住や「地域居住体験」、本州の大学生がホームステイして一次産業を学んだり、地元の子どもたちとふれあったり、地域のお祭りに参加したりする滞在型の教育交流や京都の小学校の体験型修学旅行受け入れ、特産品のPRや販売拡大の取り組みを行うなど、交流（関係）人口を増やして町を活性化しようと各種の事業を進めている。

また町としても、住民が生

涯安心して暮らせるよう認定こども園はぜるの開園（一〇九年四月）や、中高生を対象とした公営学習塾の開塾（一〇一八年一〇月）、認定こども園や小中学校の給食、高齢者の宅配給食の提供や災害時の炊き出し機能を併せ持つ総合給食センターの開設（一〇一七年八月運営開始）、地域交通の確保に向けた移送サービス実証実験など、地域課題の解決に向けた取り組みを行っている。

農業の変遷・概要

しては山「ぼうなどさまざまな野菜が生産されている。古くから特産物として知られているのは、馬鈴しょ「マークイン」や光黒大豆である。もともとは稻作と馬鈴しょや豆類を中心とする畑作が主体の地域であったが、一九八〇年代に米の将来性が見込めないとして野菜作を導入し始めた。野菜の栽培指導体制の整備や農協施設の先行投資に加え、各種栽培試験や土壤診断を行う町農業活性化センター（一九九一年）、過重労働や労働力不足に対応する農作業受託組織として、町と農協の出資による有限会社厚沢部町農業振興公社（一九九三年）の設立などで、一九九〇年代にはだいこんなど露地野菜の产地を形成してきた。

その後、一九九〇年代半ばをピークに野菜の作付けが徐々に減少しかし、近年は、小麦ha以上層は一〇・三%）となつてきおり、野菜の品目もだいこんやにんじんからかぼちゃやブロッコリー、アスパラガスなどにシフトしている。二〇〇一年には厚沢部町農協をはじめ一三農協が広域合併してJA新はこだてが誕生、町内には南樽山地域を管轄とする厚沢部基幹支店が置かれている。

農林業センサスによれば、二〇一五年の販売農家数は二四六戸で一〇年前の一九九五年に比べ半減している。販売農家一戸当たりの経営耕地面積は一三・一haで一〇年前に比べ一・八倍になった。経営面積は一三・一haで一〇年前に一〇年前は一〇ha以上層が二六・一%（一〇ha以上は七・七%）だったが、一〇一五年は一〇ha以上層が四一・九%（一〇ha以上層は一〇・三%）となり、全体の一割の一〇ha以上層も三・七%となり、全体の一割の一〇ha以上の販売農家が経営耕地の六割を占めるなど規模拡大が進んでいる。借地が規模拡大に寄与していることが特徴で、借地率は一九%から三九%へ上昇した（表1）。

農業産出額（農業粗生産額）は野菜の産出額の増加に伴い一九九四年には五一億八千万円とピークに達したが、その後は米や野菜などが減少し、近年は二〇億円程度となつている。農産物販売金額規模別の販売農家数を一〇年前と比較してみると、一千万円未満の層については農家数、農家数割合とも減少し、一千万円

以上の戸数の割合が増えてい
るもの、五百万円未満の層
が依然として四七%（一〇年
前は四九%）を占めている（図）。

厚沢部町では昨年一月、二

〇一〇年度から一〇一四年度

までを計画期間とする「厚沢

部町農業発展計画 農に生き
るパートナ」を策定。「安全・

安心の産地づくり」「生産性

と品質が向上する産地づくり」「

「未来に向けた経営体づくり」

を基本方針とし、それぞれに

取り組む内容や評価項目を定
め実行している。當農類型は、

畑作に水稻や野菜を組み合わ
せた概ね五〇ha以上の大規模

経営に三つ、水田・畑作・野
菜複合の中規模経営（一五〇

ha）に三つ、小規模な施

設野菜専業経営と七つのタイ

プを示している。なお、「パ

ート」がスタートしたのが一
九八六年である。

農業発展計画の目標達成を
支援するため、町でも独自の
施策を講じていて。農家が負
担する農業保険制度（収入保
険・農業共済）の掛金（保険
料）の三割までを助成する事
業は、全道的に珍しい取り
組みだと思われる。

特産品はジャガイモ「メー
クイン」。かつて町内にあつ
た檜山農事試作場で一九二五
年に初めて試作されたことか
ら、厚沢部町はメークイン発

表1 販売農家の動向から見た厚沢部町農業構造の推移

区分	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年
販売農家数（戸）	491	413	355	301	246
減少率（%）	14.6	15.9	14.0	15.2	18.3
経営耕地面積（ha）	3,646	3,441	3,519	3,350	3,256
うち田	1,879	1,742	1,749	1,753	1,650
うち畠	1,766	1,699	1,765	1,591	1,595
1戸当たり経営耕地面積（ha）	7.4	8.3	9.9	11.1	13.2
経営耕地面積規模別戸数（戸）					
5ha未満	254 (51.7)	208 (50.4)	173 (48.7)	136 (45.2)	96 (39.0)
5～10ha	109 (22.2)	82 (19.9)	67 (18.9)	58 (19.3)	47 (19.1)
10～20ha	90 (18.3)	82 (19.9)	64 (18.0)	50 (16.6)	53 (21.5)
20～30ha	29 (5.9)	27 (6.5)	25 (7.0)	29 (9.6)	21 (8.5)
30～50ha	9 (1.8)	11 (2.7)	16 (4.5)	20 (6.6)	20 (8.1)
50ha以上	— —	3 (0.7)	10 (2.8)	8 (2.7)	9 (3.7)
借地計（ha）	676	841	1,145	1,198	1,230
うち田	234	328	448	592	584
うち畠	442	513	697	606	639

資料：農林水産省「農林業センサス」

注1：1990年の販売農家数は575戸

注2：「経営耕地面積規模別戸数」の下段は構成割合（%）

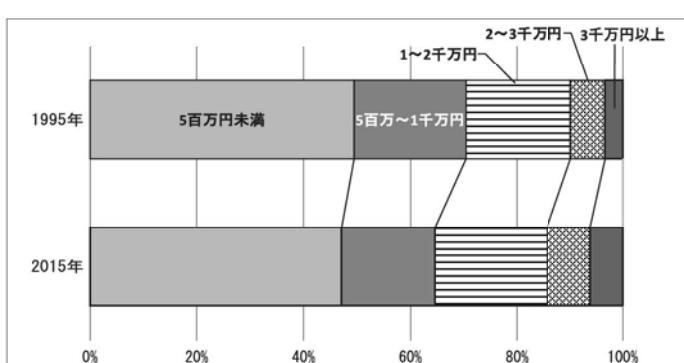
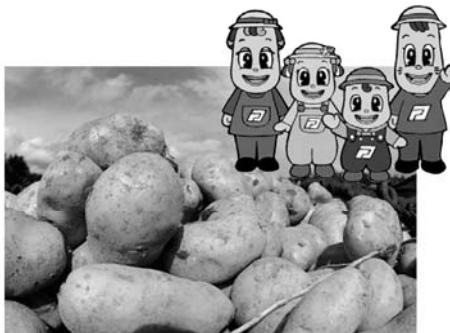


図 農産物販売金額規模別販売農家数割合（厚沢部町）

資料：農林水産省「農林業センサス」

シンボルの
あつさぶメークイン



▲あっさぶメークインとおらいもファミリー

祥の地としている。肥培管理の徹底や優良種苗の普及に努め、主に京阪神・九州方面へ食用や種子用として販売している。現在、「あっさぶメークイン」の地域団体商標登録に向け、町を挙げて認知度の向上に取り組んでいる。

町のゆるキャラ「おらいも君（おらいもファミリー）」はメークインをモチーフにしており、町のカントリーサイエンになつている。町のイベン

トなどには着ぐるみが登場し、町のイメージキャラクターとして大活躍している。

夏を彩る最大のイベント「ふるさと夏まつり」の田玉になつていているのが、あっさぶメークインを使った、直径二メートルを超える巨大なコロッケ作りである。調理には人の手だけでは無理なのでクレーンも使われ、およそ一千食分のコロッケを来場者に振る舞っている。JJAの厚沢部基幹支店

が主催する大収穫感謝祭では、あっさぶメークインの塩煮を来場者に配っている。

素敵な過疎づくり（株）と厚沢部町では、あっさぶメークインを広くPRすることを目的に、昨年まで六回にわたって「あっさぶメークインコロッケコンテスト」を開いてきた。

五、六回目の最優秀賞作品に

第三者継承で新規就農者を呼び込む

全国から応募があつた作品の中から最優秀賞等が選ばれた。今後は最優秀賞作品の商品化をめざしていく。

なお、道の駅あっさぶでは、地元の米やジャガイモ、キャベツ、かぼちゃなどの農産物や農産加工品、お菓子などが販売されている。

役場農林商工課（事務局…手育成対策協議会（事務局…）は新規就農希望者向けのホームページを開設した。現在協議会では、第三者継承を前提としたアスパラガスのハウス立莖栽培で

については、道の駅あっさぶで販売している。今年は、このコロッケコンテストを「第一回あっさぶメークインレンシピコンテスト」を開催した。「あっさぶメークイン」を使った料理なりジャンルを問わず応募できるもので、一〇月末には最終審査があり、



▲道の駅あっさぶ 地場産の新鮮な野菜などが販売されている

の新規就農者を受け入れている。就農場所の確保に加え、施設や機械の投資額を抑えられること、天候の影響を受けにくく、小さな面積で営農が可能なこと、単価が比較的高いことなどから、新規就農者が安心して営農に取り組むことができるとしている。

協議会では就農に関するさまざまなイベントに参加し相談を受け付けている。近くでイベントがない場合は電話による問い合わせや直接町に来ての相談も受け付ける。冬期間など厚沢部町での生活が不安というような場合は、移住体験用の「ちょっと暮らし住宅」を使って、厚沢部町での暮らしを体験できる。住宅には家具や電化製品、調理器具や食器類、寝具までそろっているので、ボストンパッカーつで移住体験することができます。

第三者継承を希望する農家との間で研修の受け入れが決まった場合は、地域おこし協力隊として採用する。協力隊員として厚沢部町に赴任して給料をもらいながら農業研修に従事し、農業に関する知識や技術などを習得することができます。期間は最長で三年間。この間、研修先の農家に加えて担い手対策協議会構成機関の専門職員が就農希望者を支え、さまざまな相談にのる。研修を修了していよいよ営農開始となる。

新規就農した場合には町の「農業担い手育成に関する条例」に基づき、町から奨励金として百万円交付されるほか、農用地等の年間賃借料の二分の一の額、あるいは取得した農用地等に課せられる固定資産税相当額が五年間交付され、経営開始期の新規就農者にとって大きな支援となる。二〇一二年以降アスパラガス栽培で三名が新規就農しており、現在一名が研修中である。

支援組織の近況



▲アスパラガスの伏せ込み栽培

沢部町内と町外とでは差が設けられている（表2）。

現在公社は臨時やパートを含め一〇人の職員があり、作業受託事業や育苗事業などの業務を担っている。このうち二名は農協からの出向職員である。

一〇一九年度の営業収益で

表2 作業受託料金の一例（2020年度）

作業内容	単位	作業受託料金	
		町内者	町外者
ラジコンヘリ水稻防除	円/10a・1回	1,050	1,150
小麦ドリル播種	円/10a	1,400	1,650
堆肥散布5t以下	円/10a	3,200	3,250
大根収穫	円/10a	15,500	17,000

厚沢部町農業振興公社資料より

表3 営業収益の構成割合

(単位: %)

区分	2017年度	2018年度	2019年度
作業受託	60.2	62.7	57.0
ラジコンヘリ防除	29.9	37.7	31.8
水稻	28.3	30.0	30.0
小麦播種	6.4	6.4	6.9
耕耘	3.1	3.1	2.8
堆肥散布	5.7	5.7	7.3
ハウス除雪	2.8	1.2	0.1
融雪剤散布	5.3	2.5	0.1
大根収穫	3.3	2.8	3.0
育苗事業	29.6	29.9	33.9
アスパラ苗	2.7	2.4	2.8
プロッコリー苗	14.9	14.6	17.7
キャベツ苗	6.0	6.2	6.4
カボチャ苗	2.4	2.1	2.5
ビート苗	3.2	3.2	3.4
農産物販売	10.1	6.2	9.1
雑収入	—	1.1	—
合計	100.0	100.0	100.0

厚沢部町農業振興公社資料より

融雪剤散布の記録的に積雪が少なく、ハウス内除雪や

沢部町周辺はしこの年、厚（表3）。ただ

記録的に積雪が少なく、ハウス内除雪や融雪剤散布の

スパラガス（伏せ込み栽培）、種子馬鈴しょ等の農産物収入が営業収益の九%を占めている

免許合宿で
人手を確保

人手確保対策としては、夏の農繁期に学生らによる農業アルバイトの取り組みを行っている。夏休みの学生アルバ

は、作業受託事業の収益が全体の五七%を占めている。収益の大きい作業はラジコンヘリによる防除作業で作業受託収益の五六%を占める。水稻防除が主体で、畑作物の防除作業量は天候に大きく影響される。次に大きいのが堆肥散

育苗事業の収益が全体の三四%で、プロッコリーやキャベツ、アスパラ、かぼちゃなどの野菜苗やビートの苗を供給している。また、公社の試験圃場で生産される大豆やア

これらの支援組織は農家戸数の減少や作付け作物の変化に対応しながら、野菜作の維持・安定や土地利用型農業の発展を支え続けている。

受託作業が激減し、これが主な要因で設立以来初の赤字となつた。

イトの「農作業合宿」とこの発展形の「〇円免許合宿」である。〇円免許合宿とは、農作業のアルバイト賃金を自動車や狩猟の免許取得費用に充て、実質的に無料で免許を取得する取り組みである。

近隣の大学では夏休み期間中に学生寮が閉鎖されるが、学生には「帰省せずに北海道ならではの体験がしたい」と

の思いがあり、地域おこし協力隊員がこの学生の思いと農家の手不足解消とをマッチングする企画として、二〇一四年に農作業アルバイトの合宿を始めた。翌年には、町内の農家を中心に任意団体「厚沢部農業会」を設立し、地元の自動車学校との共同事業として「〇円自動車免許合宿」を始めた。大学生に限らず全国から人を募集している。一

六年からは参加者から
の要望もあつて狩猟免許合宿も始めている。一九年まで年間二〇～四〇人が合宿に参加している（表4）。

こうした紹介した農林業センサスのデータは二〇一五年までであるが、間もなく二〇一〇年のデータが公表される。一五年以降の変化が大いに気になる。

者に農作業を通して農業の楽しさや難しさなどを伝えるとともに、参加者と農家や地域住民との交流や、参加者の町内行事への積極的な参加などにより地域の活性化にも良い効果を及ぼしている。

表4 免許合宿の取組状況

区分	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
農作業合宿	11人	19人	15人	12人	7人	26人
〇円免許	—	5人	10人	4人	7人	7人
狩猟免許	—	—	13人	6人	15人	13人

厚沢部町役場提供資料より

〈取材後記〉



▲ヒバ爺さん

厚沢部町のもう一つのシンボル。樹齢550年を超えるといわれるヒノキアスナロ(ヒバ)の巨木(土橋自然観察教育林)。

関係者は、現実を踏まえた上

で過疎をポジティブに捉えた

発想で農業の新たな展望を切り拓いていかれることだらう。

厚沢部町役場や農業振興公

社の皆様には、取材の対応や

資料、写真の提供など多くの

ご協力を頂きました。誌面を

借りてお礼申し上げます。

紹介した農林業センサスの

データは二〇一五年までであ

るが、間もなく二〇一〇年の

データが公表される。一五年

以降の変化が大いに気になる。

厳しい状況にあっても地域の

一般社団法人

北海道地域農業研究所

特別研究員

三津橋 真一